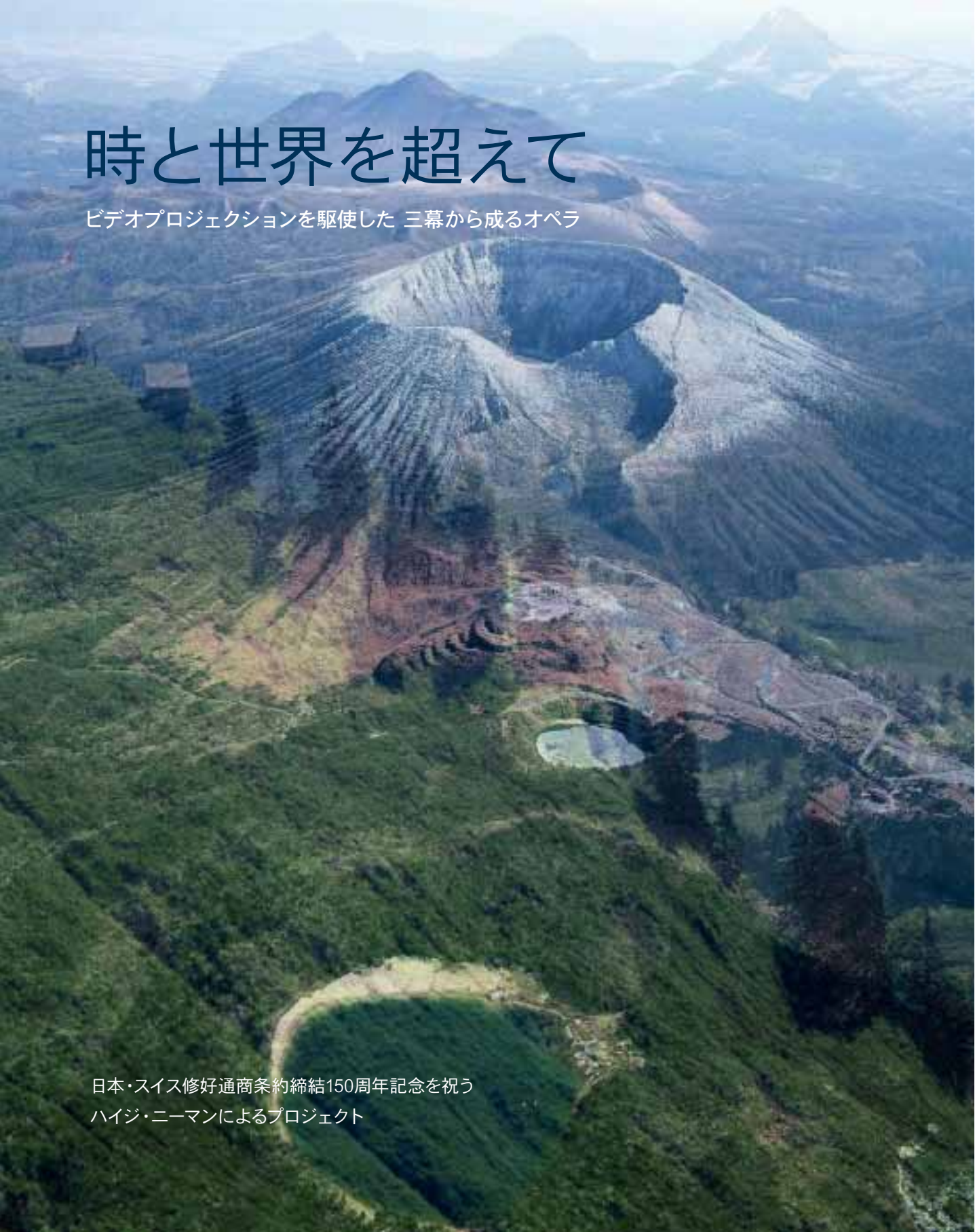


時と世界を超えて

ビデオプロジェクションを駆使した 三幕から成るオペラ

日本・スイス修好通商条約締結150周年記念を祝う
ハイジ・ニーマンによるプロジェクト

時と世界を超えて

ビデオプロジェクションを駆使した 三幕から成るオペラ

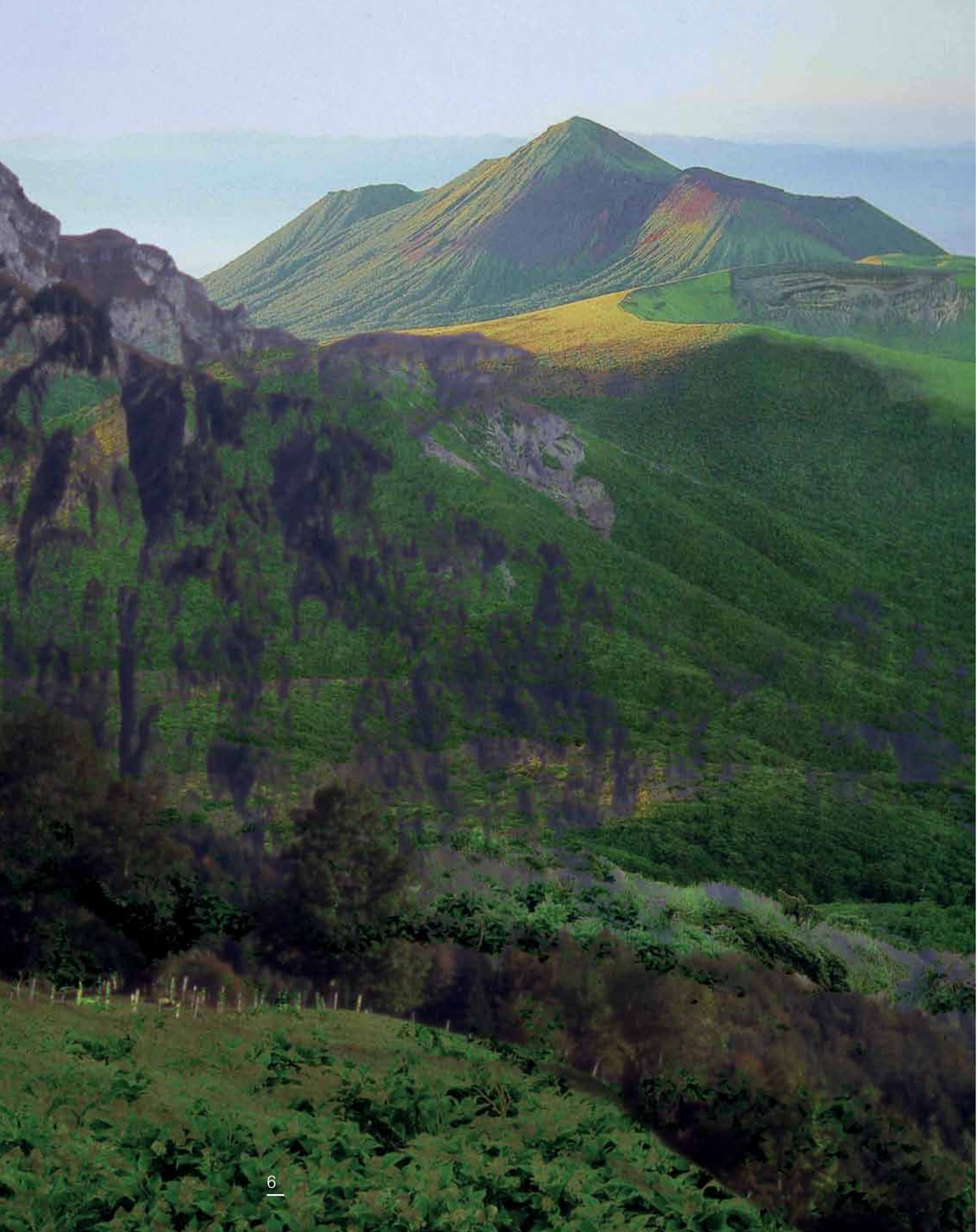
日本・スイス修好通商条約締結150周年記念を祝う
ハイジ・ニーマンによるプロジェクト

コンタクト：
ハイジ・ニーマン　Heidy Nyman
Tannegg 3
6005 St. Niklausen – Luzern
Switzerland

携帯番号：+41 76 340 93 69
メール：heidynyman@sunrise.ch

目次

07 プロジェクトの要約
11 まえがき
13 プロジェクトの内容
14 基本コンセプト
16 あら筋
18 主題とモチーフ
21 メディア概要
22 楽器編成と歌唱
23 キャスト・スタッフ
24 演奏者
25 プロジェクト組織
28 舞台構成・公演日程
30 出演者・スタッフのプロフィール
43 あとがき



プロジェクト要約

遠くて見知らぬ —
けれども
身近でなじみがある

オペラ「時と世界を超えて」はピアニスト、指揮者であるハイジ・ニーマンによって作曲され、日本スイス通商友好条約締結150周年記念祝賀の一環として初演される。引き続き日本とスイスで上演される。
ドイツ語と日本語で構成されたこのオペラでは、両国それぞれの伝統と現代が交錯し、時代を超えたストーリーが、斬新なマルチメディアを駆使した舞台で展開する。
この作品は、住民、国土、文化など両国それぞれに固有な面をとりいれながら、音楽を通して伝統と現代を結びつける。そして、両国の音楽も結びつく。こうして出来上がった作品は、二国間の相違点と類似点を通して、時と国境を超えた親交ときずなのしるしとなる。

作者のことば

良い道連れは
道のりを短くする

（日本のことわざ）

スイスクラブ東京の会長を務める伊藤ベアトリス夫人のおかげで、私は日本・スイス外交関係150周年記念について知りました。その際、私が日本、とりわけ人と文化に傾倒している、ということで、記念を祝う音楽プロジェクトをスイス大使館に提出するように勧められました。

数年前に、私は日本とスイスを舞台にする物語「時と世界を超えて」を書きました。タイトルには、時間、空間、言語を越えて二つの世界を愛と友情で繋ぐ物語、という思いが込められています。二つの国の人々、文化の背景と多様な伝統を表現するため、私はオペラという形を選びました。150年の時の流れの中、日本とスイスを舞台にした物語が、異なった二つの時代設定で夢と現実をおりまぜながら演じられます。

舞台では画像とビデオのプロジェクションによって視覚的に新たな次元が創りだされ、両国での状況設定にリアリティーを増します。音楽自体は日本とスイスの伝統的要素をベースとし、私はそれを発展させて、作曲に組み込みます。

2013年8月
ハイジ・ニーマン

プロジェクトの内容

故郷とは
言い表せない
親密さがあるところ

スイスにとって日本は、アジアで最も大切なパートナー国のひとつである。両国は強い経済関係に加えて、政治的、及び多面的な領域で緊密な協力関係にある。2013/14年に日本とスイスは両国の外交関係150周年記念を祝して、様々な文化的イベントを開催する。

記念イベントは2013年の秋に始まり、一年にわたり開催される。この文化交流は両国大使館の強力な文化事業によって支援されている。

オペラ「時と世界を超えて」は記念にあたる2014年に、ベルンと東京で初演され、その他の公演がスイスと日本で予定されている。

基本コンセプト

長旅に出かける人は
開かれた感性をともなう

三部作オペラ「時と世界を超えて」は3幕、12場から構成される。この音楽劇の舞台は画像とビデオのプロジェクションによって補完される。音楽と演技が進行するにつれ、人、文化、伝統、風景が別な次元で展開する。

音楽的な範囲は両国の伝統音楽から現代音楽にまでおよぶ。オーケストラは弦楽器、管楽器、打楽器、ならびに日本とスイスの伝統楽器で構成される。

ドイツ語の脚本は日本語に翻訳される。日本が舞台になる場面は日本語で歌われ、スイスが舞台になる場面はドイツ語とスイスドイツ語で歌われる。四つの地域のそれぞれの言語で歌われる民謡は、スイスの多様な言語文化を表現している。

プロットの概要

現実は夢 —
夢は現実に！

このオペラは、スイス人マリアの物語である。彼女は子供の頃から、見知らぬながらなじみのある風景の夢をみていた。大人になった彼女は、それが日本の風景であることを知る。彼女は日本語を学び霧島へと旅立つ。そこで彼女が実際に見つけるのは、なんと夢で見た場所と人々。

現実のアクションと夢の組み合わせに関しては、スイスと日本を舞台にした場面が交互に演出され、音楽が双方を結びつける要素として使われる。場面の移行に際して常にあるメロディーが伴うが、それはマリア、または夢に現われた歌い手によってロずさまれる。マリアの夢は遠い過去へ遡るため、オペラは150年という長い期間を包含することになる。

第1幕　マリアの子供時代

第1場　イントロ、1970年頃。
グラウビュンデン地方のある山村、田舎風景の中でマリアとその家族の登場。

第2場　第一の夢、1870年頃。
火山噴火で破壊された土地を一人の少女（まり子）がさまよっているところ、老婆の姿をした精霊に救われる。

第3場　第一の夢、1870年頃。
老婆はまり子をとある神社へ連れてゆき、まり子の面倒を見てもらうようにとりはからう。

第4場　早朝、1970年頃。
マリアは目覚めてからも、夢の中の歌を覚えている。

第2幕　大人になったマリア — スイス

第1場　祭り、1990年頃。
マイエンフェルドでの民族祭り。マリアの母親が歌う。大人になったマリアは母親の歌に耳を傾ける。

第2場　山登り、1990年頃。
マリアがマイエンフェルドから山を登りハイジ博物館へ向かう。途中休憩し、眠り込む。

第3場　第二の夢、1890年頃。
マリアは霧島の村の中で宙に浮いている。彼女は話し中の巫女と老婆（精霊）を見守っている。巫女は、以前マリアが夢で聴いた歌を口ずさむ。

第4場　目覚め、1990年頃。
マリアは日本の霧島の村が実存することを知る。

第3幕　大人になったマリア — 日本

第1場　霧島、2011年。
マリアが霧島に到着する。マリアはその土地と神社に深い親しみを感じる。例の古い歌を口ずさむ老婆に会う。

第2場　霧の中、2011年。
マリアは子供の頃夢でみた火山の風景を探し歩くが、山に広がる霧の中で迷う。

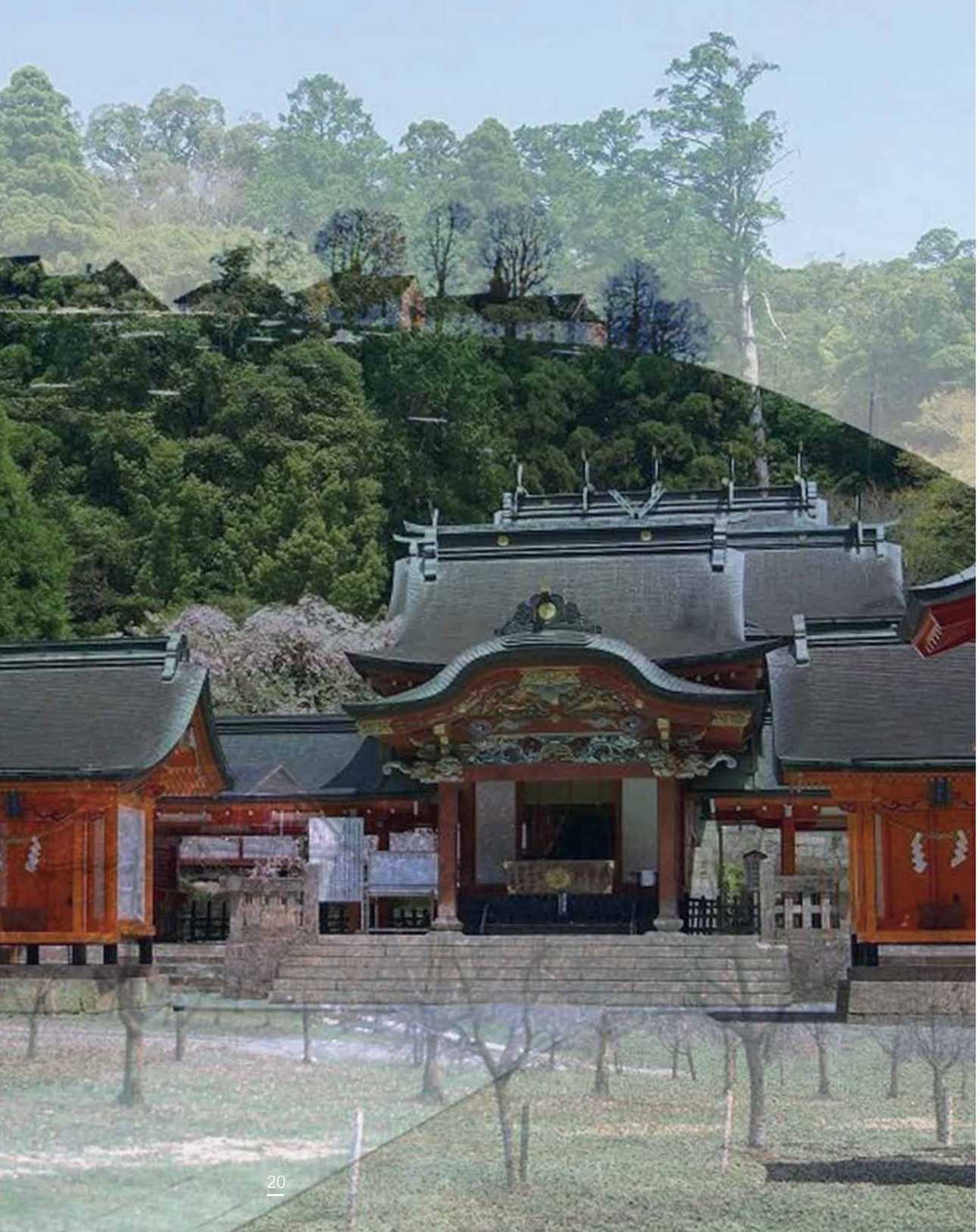
第3場　夜、2011年。
マリアは古い石像の傍らに身を寄せ、そこで一夜を明かす。絶望のあまり、マリアは夢で聴いた古い歌を口ずさむ。翌朝、マリアが目覚めると、まわりは子供の頃夢で見た風景。

第4場　救い、2011年。
とある男がマリアを見つける。彼はマリアに、昔、付近の野原一帯と村を破壊した火山がまた活動を始めたため、この場所が安全でない、と伝える。彼は先祖の供養のために絶えずこの地を訪れているという。彼の話しが夢の内容通りで、マリアは驚き、例の古い歌を歌いだす。男はそれを聴き、驚きの眼差しを向ける。彼は祖母を通して歌を知っており、マリアと一緒に歌いだす。二人は連れだって谷に下りて行く。友が一緒であればどんな道も長くない、と男はマリアに言う。

主題とモチーフ

見知らぬながら親しみがあり
遠くても身近

主人公マリアが巫女に感情移入することは、暗に日本とスイスの緊密な繋がりを表す。「古い歌」とは、マリアが子供の頃からいつも夢の中で聴いた日本のメロディー。それは言葉では表せない独特な親密さを象徴する。おとぎ話のようなマリアの物語は、実際に起こった出来事にもとづくが、独自の言葉とイメージにより感動的な筋書きとなる。事実はそれ自体が目的となるのではなく、筋書きの中で一つの要素として使われる。



メディア概要

音楽

形式は両国の伝統音楽から現代音楽にまで及び、オーケストラは弦楽器、管楽器、打楽器、ならびに日本とスイスの伝統楽器で構成される。

劇

物語は、オペラの筋書きにそって舞台で展開する。台本のせりふは、両国の言葉で歌われる。日本が舞台になる場面は日本語で歌われ、スイスが舞台になる場面はスイス・ドイツ語で歌われる。

画像とビデオのプロジェクション

画像とビデオのプロジェクションは音楽とストーリーを補完し、両国を新たな局面から浮かび上がらせる。

脚本

オペラの筋書きは、ドイツ語および日本語の伝統的な詩の形式、そして脚本向けの自由な文体に基づく。ドイツ語の部分は日本語に、日本語の部分はドイツ語にそれぞれ翻訳される。

楽器編成と歌唱

スイス民謡の伝統的な楽器と西洋クラシックの楽器、とりわけ、アルプホルン、チター、スイスアコーディオン、クラリネット、フルート、オーボエ、弦楽五重奏の楽器などが用いられる。神楽、歌舞伎、能楽に使われる日本の伝統楽器、たとえば琴、琵琶、三味線、篠笛、尺八、和太鼓、太鼓などが用いられる。

登場人物と声域

マリア（グラウビュンデンの少女、成人後の女性）：ソプラノ
母（マリアの母親）：アルト
父（マリアの父親）：バス
観光ガイド（日本人男性）：テノール
まり子（日本人の少女、神社の巫女）：メゾソプラノ
老婆（時を超越した老女）：アルト
神官、霧島の男（日本人男性）：バリトン
（公演はコーラス付、あるいはコーラス無しで上演され得る。）

キャスト

オペラ「時と世界を超えて」の配役は以下の通り。

マリア	マデレーネ・ウィーボム / マリソル・シャリット
まり子、巫女	加藤苑絵
老婆	太刀川昭
マリアの母親	コリン・クルシェラス
マリアの父親	アルビン・ブルン
観光ガイド	西岡愼介
神主、霧島の男	関口直
演出	笈田ヨシ
舞台美術（ビデオと画像）	ニノ・ジャクソ（未定）
ビデオと画像素材	エーリヒ・ラングヤール ― 野間順一 北村和行
脚本	フェデリカ・デ チェスコ
日本語訳脚本	北村和行
音楽監督・指揮	ハイジ・ニーマン

器楽アンサンブル

弦楽器：

ヴァイオリン	河村典子
第2ヴァイオリン	山口慶子
ヴィオラ	岩木保道
チェロ	入澤百合子
コントラバス	白土文雄

その他の楽器：

リュート/テオルボ	ロザリオ・コンテ
打楽器	未定

管楽器：

フルート	ベダ・マスト
クラリネット	大谷淳子
オーボエ/オーボエダモーレ	エドムント・ウォースフォルト・ヴィダル
ファゴット	未定

スイス：アンサンブル　ラ・グリシャ

歌	コリン・クルシェラス
アコーデオン	パトリシア・ドレーガー
スイスアコーディオン/サクソフォン/打楽器	アルビン・ブルーン
コントラバス	クラウディオ・シュトレーベル

日本：アンサンブル日本

尺八	田嶋直士
琵琶	半田淳子
琴	日吉章吾
三味線	帯名久仁子
和打楽器	関口百合子

プロジェクト組織

音楽監督/コンサート運営	ハイジ・ニーマン
日本スイス間のコーディネーション	ベアトリス・伊藤
コーディネーション/運営	河村典子 アンサンブル日本
コーディネーション/運営	コリン・クルシェラス アンサンブル・ラ・グリシャ
日本語翻訳	河村典子 北村和行

舞台構成

オペラの上演形態は若干変更可能で、舞台に照明と音響システムが装備されたホールで上演できる。

舞台で使われる画像とビデオ映像は、ロール巻込み式透明布地またはキャンバス・スクリーンに投影される。なお舞台装置は簡素で、容易に組み立てられる。

オペラのキャストは音楽家16人と声楽家6～8人（日本、スイス半々）で構成される。オペラはコーラスつき、または抜きで上演され得る。

公演日程

スイス：

ルツェルン	2014/06/13	KKLルツェルンホール

その他、ベルン、チューリッヒ、クール、ビール、バーゼルでの上演を予定

日本：

東京	2014/8/30	サントリー　小ホール ブルーローズ

その他、京都、名古屋、神戸、霧島での上演を予定

主催（スイス）	日瑞協会
主催（日本）	スイスクラブ
後援	在日スイス大使館、在スイス日本大使館

出演者・スタッフのプロフィール

ハイジ・ニーマン　Heidy Nyman

音楽監督、作曲

スイス生まれのピアニスト、指揮者であるハイジ・ニーマン（1959年〜）は、フリーの音楽活動家であり、ピアノ教師でもある。1983年にピアノ学科を卒業した後、家族と共に長い間スウェーデンのストックホルムで過ごす。
スウェーデン滞在時は、ストックホルムにあるオースタスケール音楽院のオペラ学校で、ピアニスト、指揮者であるインガー・ウィックストロームのもと、伴奏者、ピアノ教師として働く。
スイスへ帰郷し、彼女はビール及びソロトゥルン市立劇場コーラスのソプラニストとしてさらにオペラの世界への情熱を深めていく。ジュネーヴ音楽院（ミシェル・コルボ）、ルツェルン音楽大学（ウルリーケ・グロッシュ）ではコーラス指揮を主専攻とし、オーケストラ指揮（ローレン・ゲイ）を副専攻として学ぶ。そのほかオーケストラ指揮をスルボリウブ・ディニックのもとで修了し、トン・コープランド、ベルナルド・ハイティンクのマスタークラスで学ぶ。
ハイジ・ニーマンは現在ルツェルンに在住し、いくつかの音楽学校でレッスンをする傍ら、伴奏者、コーラス/オーケストラ指揮者としても活躍する。フリーの音楽家としては国内外（スウェーデン、日本など）でコンサート活動をしている。

河村 典子　Noriko Kawamura

ヴァイオリン、コンサートマスター、
コーディネーション・オーガナイズ「アンサンブル日本」

3歳よりヴァイオリンを始め、毎日学生音楽コンクール全国の部第1位。桐朋学園大学音楽部を経て、西ドイツ政府留学生としてミュンヘン・エッセン・ベルリン各音楽大学にて研鑽を積む。1979年よりスイス在住、チューリヒオペラハウス第2ヴァイオリン首席として1984年から1992年まで在籍、その後フリーとしてチューリヒを拠点に音楽企画・制作の「オフィスN」を立ち上げ、演奏活動、指導活動、CDやコンサートのプロデュース活動を積極的に行う。
2004年スイス外務省の助成を受けスイスの若手音楽家による弦楽合奏団を日本へ招聘、また、2008年ヴェトナムでのオーケストラ・ワークショップなど、若手音楽家を交えた国際交流的なプロジェクトも数多く行っている。
また、日本の伝統音楽、演劇、創作ダンス、パントマイムなど異ジャンルや、現代作曲家との数多くのコラボレーションを行い、室内楽のジャンルにおける初演も数多い。

マデレーヌ・ウィーボム　Madelaine Wibom

ソプラノ

スウェーデンのソプラノ歌手マデレーヌ・ウィーボムはストックホルム・オペラ音楽大学に学び、イレアナ・コトゥルバス、グレース・バンブリー他、数多くのマイスターコースに参加している。
1998年～2012年までルツェルン市立歌劇場のアンサンブルに属し、50以上の役柄をこなした。モーツァルトの「フィガロの結婚」スザンナ、「ドン・ジョヴァンニ」エルヴィラやツェルリーナ、「コシ・ファン・トゥッテ」デスピーナ、「魔笛」パミーナなどや、レオンカヴァレッロの「道化師」ネッダ、プッチーニ「ラ・ボエーム」ムゼッタ、ビゼー「カルメン」ミカエラ、ヴェルディ「リゴレット」ジルダ、シュトラウス「こうもり」ロザリンデ、など。
2012・13のシーズンには、ルツェルン市立歌劇場のゲストとしてブルーノ・マデルナ「サテリコン」に出演、また2007年の同劇場のPrix Galaでは、「ルツェルンの愛される歌手」に選ばれた。
ヨーロッパ各地での客演では、さまざまなオペラの役を演じるとともに、ソリスト、リート歌手として活躍している。

加藤 苑絵　Sonoe Kato

メゾソプラノ

京都市立堀川高等学校音楽科（現・京都市立京都堀川音楽高等学校）を経て、京都市立芸術大学音楽学部卒業、同大学院修了。2002年よりロータリー財団奨学金を受けスイス・チューリヒ芸術大学（ZHdK)音楽学部に留学、コンサートディプロマおよびソリストディプロマを最優秀にて取得。藤花優子、三井ツヤ子、リーナ・マリア・オーカルント、マルグレート・ホーニッヒの各氏に師事。リート解釈をアーウィン・ゲイジ、ハルトムート・ヘルの各氏に、発声法をメイナルド・クラーク、バロック唱法をジル・フェルトマンの各氏に、ヨーロッパ各地での講習会にて学ぶ。
ソリストとして主にスイス国内にてソロ・リサイタルや各地での公演プロジェクト、また現代音楽の公演や新進作曲家の新作初演に多く携わる他、各地アンサンブルとの共演、舞踊芸術との舞台共演、ジャズフェスティヴァル出演などジャンルを超えた幅広い分野での活動を行っている。2009年にはPro Helvetia（スイス・アーツ・カウンシル）主催による中国・北京、上海、西安などへのツアーおよび講習会での指導や、スイス現代音楽家協会（Schweizerischer Tonkünstlerverein/Association Suisse des Musiciens）主催の現代音楽フェスティバル（ローザンヌ・2009）などに招かれる。
「ヴォカール・アンサンブル・チューリヒ」（Vokalensemble Zürich)に所属し、主に後期ルネサンス期からバロック時代の声楽曲と現代音楽作品を組み合わせた独自のプログラミングに取り組み、スイス国内やヨーロッパ各地の音楽フェスティヴァル等に出演。またイザベル・ムンドリーをはじめとする現代音楽作曲家の初演公演にも多く携わる。
また2007年にチューリヒにて結成された現代音楽器楽アンサンブル「アンサンブル ツァラ」（Ensemble Tzara）の一員として、新しい音楽様式や現代音楽プロジェクトに積極的に取り組んでいる。

コリン・クルシェラス　Corin Curschellas

アルト

コリン・クルシェラスはスイスのシンガーソングライター、ジャズ歌手、女優。1956年クールに生まれる。小学校教諭ディプロムを取得後、クルシェラスはチューリヒ俳優アカデミーおよび、チューリヒ大学（音楽学専攻）で学ぶ。1977年～1983年ワルター・リエタと共に活動、数々のアルバムを発表する。1993年から1997年までウィーン・アート・オーケストラの所属歌手、2009年そのツアーにも参加するほか、数々の著名な音楽家とのプロジェクトで活躍している。
クルシェラスは、また女優としても数多くの舞台に立ち、作曲家としても映画や放送劇、舞台作品で活動している。2005年、クール市の文化賞を受賞。

マリソル・シャリト　Marysol Schalit

ソプラノ

マリソル・シャリトはビールとベルンの音楽大学に学び、2007年に優秀な成績で「リートとオラトリオ」の主要科目のコンサート・ディプロムを修める。卒業後には、クリシュティーナ・ラーキ、ハンス・ブロホヴィツ、コルネリア・カリッシュなどのもと、数々のマイスターコースに参加する。在学中からビール・ソロトゥルン市立歌劇場に出演、2006・07年にはブリテン「ねじの回転」フローラ、2008・09にはオッフェンバック「ペリコール」マヌエリータやグアダレーナ、2008年ベルンのビエンナーレではモーツァルト「コシ・ファン・トゥッテ」デスピーナなどを歌った。
彼女はフリデル・ヴァルド基金（2006年）など、様々な奨学金や数々のコンクールでのプライスを勝ち取っている、
2010年のシーズンから、ブレーメン市立歌劇場のアンサンブルに属し、モーツァルト「魔笛」パパゲーナやパミーナ、「ドン・ジョヴァンニ」ツェルリーナ、「イドメネオ」イリア、など多彩な役をこなすほか、ソリストとして、またリート歌手として活躍している。

関口 直　Naoshi Sekiguchi

バリトン

東京葛飾生まれ。国立音楽大学付属音楽高等学校卒業。国立音楽大学声楽科卒業。国立音楽大学大学院ドイツ歌曲科修了。在学中より多数の演奏会に出演。二期会オペラスタジオ修了。「魔笛」の弁者、「カルメン」エスカミーリョ、「マイ・フェア・レディ」のヒギンズ等他多数のオペラに出演。
1992年より渡独。声楽をエヴァ・ブリンクヒレマン教授に師事。1993年から1996年までドイツ国立シュトゥットガルト音楽大学大学院においてドイツリート解釈、演奏法をコンラート・リヒター教授に師事。1994年夏、オーストリアでの声楽マスタークラスにおいてクルト・ヴィドゥマー教授に師事し、多大な影響を得る。1994年より定期的にシュトゥットガルト市、フライブルク市等でドイツ歌曲リサイタルを行い、新聞紙上等で好評を博す。また宗教曲や現代音楽のソリストとしてドイツ、日本、スイス等で多数出演。
1996年秋よりドイツ・フライブルク市歌劇場と専属契約を結ぶ。第1回友愛歌曲コンクール第1位受賞。第3、4、5、6回J.S.G.国際歌曲コンクール入選。川本伸子、岡部徳三、野中匡雄、別所恵子、中村 健、ハンス・ホッター、エヴァ・ブリンクヒレマン、クルト・ヴィドゥマー、ペーター・シュライアー、コンラート・リヒター等各氏に師事。現在、ドイツ・フライブルク市歌劇場専属歌手。二期会会員。

西岡 慎介　Shinsuke Nishioka

テノール

東京都出身。國學院大學文学部日本文学科卒業。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科声楽専攻独唱科修了。大学卒業時に同声会賞受賞。同声会新人演奏会に出演。二期会オペラ研修所第51期マスタークラス修了。修了時に優秀賞受賞。
二期会新進声楽家の夕べに出演。2010年フランクフルト・アン・デア・オーダーで開催された第20回Oper Oder Spree国際音楽祭にてグランプリ(1位)受賞。
第20回奏楽堂日本歌曲コンクール奨励賞受賞。第43回日伊声楽コンコルソ、第38回イタリア声楽コンコルソ等のコンクールに入選などのほか、モーツァルト「レクイエム」、「戴冠ミサ」、ベートーヴェン「第九」、ハイドン「天地創造」、ベルリオーズ「レクイエム」等の宗教曲のソリストを務める。2012年オーストリア・アイゼンシュタットで開催されたエスターハージー音楽祭に出演、など宗教曲やオペラの幅広いレパートリーで活躍している。
フライブルク市立歌劇場2012/13シーズン公演、に客演契約歌手として出演、2013/14シーズンより同歌劇場専属歌手として契約を結ぶ。二期会会員。

エフェデリカ・デ・チェスコ　Federica de Cesco

脚本

スイスの作家、フェデリカ・デ・チェスコは、ヴェネチアの北方、ポルデノーネで生まれ、父はイタリア人、母はドイツ人。幼年期はイタリア、エチオピア、少女期はベルギー、ドイツで過ごす。ベルギーのリエージュ大学で芸術史と心理学を学び、仏、独、伊、西語のマルチリンガル。１６才の時にフランス語で書き下ろした処女作「赤いマフラー」がベルギーで出版され、今では青少年向け文学の古典となる。1963年、活動拠点をスイスに移すが、独語版の翻訳に満足せず、1978年からはドイツ語で執筆。　青少年向けの作品は70を超える。中でも、10作は日本に関連した物語で、卑弥呼を主人公にした三部作も含む。その他、写真集6冊の文章を執筆、その内5冊は、1973年に結婚した写真家・北村和行との共作。1994年にドイツで出版された長編小説「銀の貝」はベストセラーリストに載り、 それまでの青少年向け作家から脱皮する。以後、2013年までに書下ろし長編小説13作がドイツの出版社から刊行。最新の作品「風の娘」のテーマも日本。これまでに数多くの作品が27カ国語で翻訳されている。
2008年には、スイスのニノ・ヤクッソ監督がドキュメンタリーフィルム「 フェデリカ・デ・チェスコ、私の人生」を作成。 ドイツ各地の小中学校教科書が採用している短編「二人のスパゲティ」は2011年に映画化され、米国などの短編映画祭で賞を受賞。2014年には、青少年向け作品「狼の少女、シャナ」がニノ・ヤクッソ監督により「狼のミュージック、シャナ」のタイトルで映画化。

北村 和行　Kazuyuki Kitamura

写真、日本語訳脚本

1947年、東京都出身。上智大学仏文科卒。ストックホルム留学中に撮った写真がスカンジナビア航空のポスター（1972）に採用されたことをきっかけに、以後、写真家として各種出版、カレンダー、ポスター、広告などの分野で活動。1976年以降、スイスの出版社から11冊の写真集を刊行。「モロッコ」、「ヴェネチア」、「スイスの祭と行事」、「ヨーロッパの祭100選」などがある。シュトゥットガルトの写真集見本市(1976/1978)で特別賞受賞。写真展は1984年、パリ、ジョルジュ・ポンピドゥー・センター、日本のキャノン・サロン（1985/1986/1988）、UBS・ルツェルン、ルガノ（1989/1990）、ヘティンゲン（独）のファスナハト博物館（2006）などで開催。
1974年、芸術新潮にエッセイを掲載以降、日本、スイスの各種月刊誌、季刊誌で執筆活動。スイス航空機内誌の日本語ページを毎号（1990～1994）執筆、編集。スイスで出版された著書には日本文化、歴史、社会に関する三冊、「今日の日本」（1983）、「日本、陰の女性パワー」（1983）、「見知らぬ隣国、日本」（1987）の他、童話「ノラと空飛ぶ杉の木」（1987）がある。
1973年、スイスの作家フェデリカ・デ・チェスコと結婚。現在、ルツェルン在住。

エーリヒ・ラングヤール　Erich Langjahr

映像

フリーの映像作家。1944年バールに生まれる。1973年より独学でスイスのドキュメンタリー映画を製作し始める。ラングヤールは数々の賞を受け、その中には2003年のスイス映画賞にて最優秀ドキュメンタリー賞、第36回ヴュルツブルク映画祭のドキュメンタリー賞がある。2002年制作活動に対して内スイス文化賞を受賞。1994年ラングヤールはシルヴィア・ハーゼルベックと共にラングヤール映画製作・配給会社を立ち上げる。ツーク映画倶楽部の代表理事、ロート文化委員会の会員、スイス映画監督・脚本家連盟および中央スイス映画の名誉会員、2007年よりスイス映画アカデミーの会員。

太刀川 昭　Akira Tachikawa

カウンターテナー

7歳時に静岡児童合唱団に入団、戸崎裕子氏に師事。4度の欧州演奏旅行に参加。1980年、東京芸術大学に初のカウンターテナーとして入学。渡邊高之助、畑中良輔両氏に師事。1988年、同大学院修士課程修了。その後、バーゼル・スコラ・カントルムに留学。R.ヤコブス、D.ヴェラール両氏に師事、中世からバロックまでの音楽を更に研究。現在もバーゼルを本拠地とし、ヨーロッパ、日本を中心に活動を続けている。新国立劇場「こうもり」でのオルロフスキー役、スイス人作曲家、M. デールングスの現代室内オペラ「シンデレラ」での王子役など、ソリストとしての活躍の他、「アンサンブル・ジル・バンショワ」、「バッハ・コレギウム・ジャパン」、「ヴォカールアンサンブル・チューリッヒ」、「アンサンブル・シンタグマ」などアンサンブルとの活動も多く、ＣＤ録音も数多い。ムジカ・パシフィカJPN主宰。
また、2011年にはアルガウ教会音楽学校を修了、合唱指揮ディプロマを取得。現在、ラウパースドルフ教会合唱団、ア・カペラ合唱団ヴォカペッラ、バーゼル・なでしこ合唱団で指揮を執る。

あなたの魂に出会い、自分が見えた
私はあなたであり、あなたは私だった。
見知らぬのになじみがあり、
遠く離れていても、身近にいた。
あなたは私、私はあなただった。
ここはあそこ、あそこはここでもあった・・・
現実は夢、夢は現実に！

あとがき

命には終わりあり。
能には果てあるべからず

（世阿弥元清）

私はこれまで長い間、日本とその文化、人々について考察してきました。その多種多様な芸術の形の中に、深い人生哲学と高い精神性よって色づけられ、裏付けされた、とても独特な美的表現様式が浸透していると思います。

三部作オペラ「時と世界を超えて」により、私は両国の独自性を結びつける機会を得ました。それと同様に結びつきを強めた友好の絆と芸術的つながりを、多層的なマルチメディアを通じて観客に伝える機会も得ました。

このプロジェクトは、両国間の往来と文化交流を一目瞭然におしすすめることで、日本とスイスの友好関係を祝い、さらにそれを強化することになります。
友好関係はなぜそんなに大切なのでしょうか？「旅は道連れ世は情け」この日本の詩的な諺が簡潔にその本質を語っていますが、それはもう一つの諺「良い道連れは、道のりを短くする」でもよく言い表されていると思います。

ハイジ・ニーマン

150

Anniversary of Diplomatic Relations
between Switzerland and Japan
日本・スイス国交樹立記念

デザイン・モンタージュ写真 : BCD I Brotbeck Corporate Design AG, Biel-Bienne I www.brotbeck.ch

2014年1月30日版